

希学園 第413回 小2公開テスト 解説動画

下記、URLよりご視聴いただけます。

動画タイトル	URL
第413回公開テスト 小2国語 解説動画(2026年10月11日実施)	https://vimeo.com/1234591546/fd9c0d2921

① 青空
② 休み
③ 一生

④ つきみ
⑤ へた

② さかな
② ほね

③ のど
④ ウ

⑤ くすぐったい
⑥ イ

③ カ
② ク
③ ウ
④ エ
⑤ ア
⑥ 才

④ あ
① ちる

③ ア
④ 小鳥や動物

⑤ I
② 2

配点

① 各2点×5=10点

②～④ 各5点×18=90点

<計>100点

①の「青」の上の部分に「王」や「主」のようにしてはいけない。「空」は「あなかんむり」である。「うかんむり」の中に「ハ」を書くようにしてはいけない。②「休」を「体」とまちがえないこと。③の「生」は「たてぼう」を上につき出す。④「月見」は秋の行事である。⑤「下手」は「へた・したて・しもて」と読む。

② おくやまゆか『うりぼうウリタ もりのがつこう』より (設問の都合上、表記の一部を変更しています)

1 「ざがなのぶらいが」のところがおかしいことになっていることに気づいてほしい。「フライのほねがのどにひっかかった」せいで、うまくしゃべれないのである。そして「ぶらい」が「フライ」のこととわかれば、「ほね」がヒントになって「ざがな」は「さかな」のことかもしれないとわかる。

2 「ウリタ」が「ガミコ」の「口のなか」を「のぞいて」も、みえなかったものである。「ほね」をみつけて取ってあげようとしたのである。

3 「もっとおく」にあるのは、さかなの「フライのほね」である。「のど」の「もっとおく」にあるようだから「モリー先生」が、さがしにいったのである。

4 「のど」の「おく」を「みてきてあげ」ようというのだが、それは「コウモリ」が何を「とくい」にしているからだろうか。「コウモリ」は昼間は洞窟にいて夜に活動する夜行性の動物である。「とくい」なのは「くらい」ところである。洞窟は「せまい」ことが多いが「コウモリ」は夜になると広い空を飛ぶのだから「せまい」から洞窟にいるわけではなさそうである。そして、そもそも「こわい」ところが「とくい」というのは、話がおかしい。

5 問1に同じく、濁点を取ればよい。ただし元のことばが「くすぐる」なので、二つめの「ぐ」の濁点は取ってはいけない。「ガミコがおなかをよじってわらいだし」たのは、「モリー先生」が「口のなか」から「のど」にはいつてきて、「くすぐりたい」からである。

6 「モリー先生」が「ガミコ」の「のど」の「もっとおく」にいるという、この場面のようなすをよく思いうかべた上で、「こくりと」から考えれば、答えが決まるだろう。

③ 「○る」の形の動詞の穴うめ問題である。それぞれの文の意味をよく考えてほしい。

① 「魚をつる」は「エビをえさにして」がヒントになっている。つり糸の先のつり針にエビをつけるのである。

② 「葉をぬる」は「きずぐち(傷口)」がヒントになっている。けがをしているのである。

③ 「布をおる」は「美しい糸」がヒントになっている。布をおるというのは、たて糸とよこ糸を組み合わせることである。

④ 「草をかる」は「かま」がヒントになっている。「かま」は草や柴をかる道具である。

⑤ 「弓をいる」は「ねらいを定めて」がヒントになっている。弓で矢を放つのである。

⑥ 「ページをくる」は「続きが読みたくて」がヒントになっている。本のページをめくっているのである。

④ 守矢 登『科学のアルバム サクラの一年』より

1 あつと声を出すほどの短い時間のことである。すぐ前に「わずかな日数」とあるのがヒントになっている。

2 「サクラの花のじゅみょう」のことである。「寒い地方では、わずか四日ぐらい」で「あたたかい地方では、十日以上」である。「さいてから」「ちるまで」ということになる。

3 「差」のことである。漢字では「開き」と書く。「四日ぐらい」と「十日以上」のように大きく「差」が開いているのである。

4 「花びらがちったあと」に「サクラの木」がおこなう「たいせつな仕事」は、◎の文にあるように「実をつくること」である。そして、それをだれに「たべてもらう」のかと考えていけばよい。「実」を「大こうぶつ」にしていたのは「小鳥や動物」であった。

5 I 「寒くなる」は「気温がさがる」ということである。「花がさいてからきゅうに気温がさがると」「ながくさいてい」るのであった。「早くちってしまう」のは「春、いつまでも寒かった年」のことであった。

II 「小鳥や動物」がたべるのは「じゅくしたやわらかい実」である。それは「赤く色づい」た実であろう。